

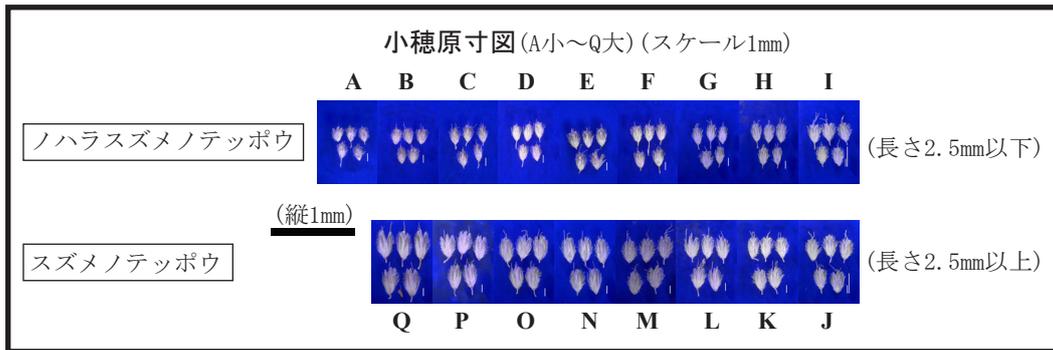
### 類似植物判定用「原寸スケール」(その1)

外部形態などで顕著な違いが見出せないため、分類群として区別する基準を的確に示せず、種子・花序・小穂・その他の部位の微妙な大きさの違いだけが区別点となる類似植物がある。また雑種などでも同様に、両親との区別を部位の微妙な大小のみで判断しなければならない場合がある。野外でこうした植物に出会ったとき、すばやく種類を決定することができるなら、研究時間の短縮や作業時間の軽減など、またフローラ調査などでも不要な採集をせずにすむなど、諸々の点で簡単かつ効率的で便利である。こうしたことを実現する一助として類似植物判定用「原寸スケール」を作成することにした。(2010/6/30 山口純一)

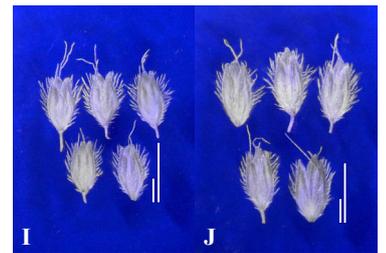
＜スケール使用法：

区別点を有する部分(種子・小穂・小花・花…部分など)をセロテープなどを用いて原寸図上で比べて判断。現物を張り込むのも良い

#### [1]ノハラスズメノテッポウ *Alopecurus aequalis* Sobol. var. *aequalis* ズメノテッポウ *A. aequalis* Sobol. var. *amurensis* (Kom.) Ohwi



参考:小穂拡大図(I・J)  
(スケール1mm, 2.5mm)

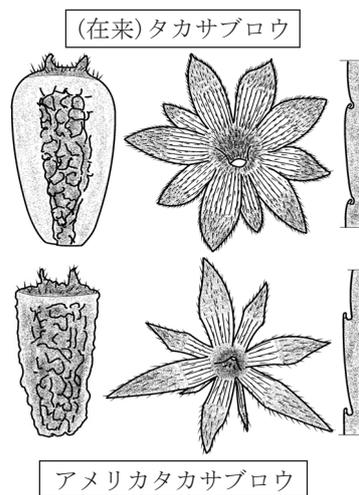
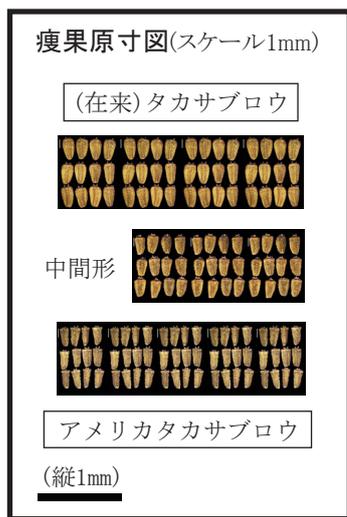


(私サイトトピック「ズメノテッポウとノハラスズメノテッポウは小穂で区別できるか?」参照)

◆花穂(花序)の長さや幅、芒の抽出度などでの種類の判定は無理であり、両変種は小穂の大きさのみで区別され、ほぼ2.5mmを境として分けられる。しかし小穂の大きさの差異は微妙で、生育現場で決定することは難しい。また両者は、水田湿地にズメノテッポウ、畑や乾地にノハラスズメノテッポウと棲み分けするとされるが、生育環境と生育種との関係は単純ではなく、あいまいな環境や田の畦・河原などの湿地での判断はなかなか難しい。種類の判定は、本スケールによる小穂の原寸の大きさと、生育環境を加味して決定し、あいまいな場合のみ採集して精査願いたい。(2010/6/30 山口純一)

#### [2]在来タカサブロウ *Eclipta thermalis* Bunge と アメリカタカサブロウ *E. alba* (L.) Hassk. との中間型

(私サイトトピック「在来タカサブロウとアメリカタカサブロウの中間形について」参照)



参考:瘦果拡大図(スケール1mm)



(中間形はおそらく雑種と考えられ、両親の間のサイズで様々なものが出現するものと考えられる)

(左から、瘦果、裏からみた萼、葉の鋸歯)

- ◇(在来)タカサブロウ : 長さ約2.5~2.7mm、巾約1.7mm。側面中央に1/3巾で縦に隆起部あり、平滑部が左右両側にある。
- ◇アメリカタカサブロウ : 長さ約2.1~2.4mm、巾約1.1~1.3mm。左右両側の平滑部はごく狭いか、または無い。

◆タカサブロウ属の果実は、種子の外側を果皮(図の果実表面の褐色部分)が被う瘦果であるが、若い果皮は最初透明から白色で、瘦果が熟すに従い徐々に発達する特徴を持つため、緑などが白い場合はまだ発達途中のものである。

◇成熟した在来のタカサブロウの瘦果には両側にやや翼状の平坦な部分があるが、アメリカタカサブロウの瘦果にも顕著ではないが両側に平坦な部分がある場合があり、瘦果が若い場合に特に目立ち誤認する事例がある。

◇萼裂片はアメリカタカサブロウの方が細く、上半部は直線的に細くなる傾向がある。また葉や鋸歯の形状も一定の傾向がある。しかし、これらはいずれも形状での明確な線引きが出来ず、参考にはなるが種類の決定はできないと考える。

◇両種間では自然雑種もしばしばみられる(梅本1997)とされ、中間形は各地で認識されており、おそらくは雑種と考えられる。あいまいな場合のみ採集して精査願いたい。(2010/7/6 山口純一)